

## 高校国語のこれから

— 新学習指導要領における  
科目改訂について



高木展郎

平成二〇年一月一七日に中央教育審議会から「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」が出された。

その中で、国語の「改善の基本方針」は、国語科については、これまでのものと大きな変わりはない。

この基本方針をふまえ、高等学校の「(ii) 改善の具体的事項」は、次のように示されている。

○ 中学校までに培われた国語の能力を更に伸ばし、社会人として必要とされる国語の能力の基礎を身に付けることができるようにするとともに、生徒一人一人の能力・適性、興味・関心に応じた多様な学習が行われるよう、各科目の構成及び内容を次のように改善する。

ここで重要なのは、「社会人として必要とされる国語の能力」ということであり、高等学校卒業時の到達目標が明確に示されていることである。

そして、各科目については、次のように示されている。

(ア) 「国語総合」は、現行の「国語総合」の内容を改善し

たものとする。実社会で活用できる国語の能力を身に付けるため、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの学習が総合的に行われるよう、内容を改善する。その際、特に、文章や資料等を的確に理解し、論理的に考え、話したり書いたりする能力を育成することや、我が国の言語文化を享受し継承・発展させる態度の育成を通して、感性や情緒をはぐくむことを重視する。

(イ) 「国語表現」は、現行の「国語表現Ⅰ」及び「国語表現Ⅱ」の内容を再構成したものとす。「国語総合」の学習を踏まえ、文章や資料等を的確に理解し、論理的に考え、適切に話したり書いたりする力など、実社会で活用することのできる表現の能力を確実に育成するとともに、進んで表現する意欲や現代の国語の向上を図る態度をはぐくむようにする。

(ウ) 「現代文A」は、近代以降の文章を対象とし「古典A」と対をなす科目として新設する。「国語総合」の学習を踏まえ、生涯にわたって日常的に読書に親しむ態度をはぐくむ。関連して、言語生活の在り方、言語の役割、国語の特質等についても指導し、我が国の言語文化に対する理解ができるようにする。

(エ) 「現代文B」は、現行の「現代文」の内容を改善したものとす。「国語総合」の学習を踏まえ、近代以降の様々な種類の文章や資料を教材として取り上げ、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの言語活動を通して、読む能力のみならず、読んだことをもとにして考え、判断・評価し、それをまとめて論理的に表現する能力を育成するとともに、文字・活字文化に対す

る理解が深まるようにする。

- (オ) 「古典A」は、現行の「古典講読」の内容を改善したものとする。「国語総合」の学習を踏まえ、古典の原文（近代以降の文語調の文章を含む）のみならず、古典についての解説文や小説、随筆なども教材として幅広く取り上げ、古典の世界に親しむ態度をはぐくむ。関連して、言語の役割、国語の成り立ちや特質についても指導し、我が国の言語文化に対する理解ができるようにする。
- (カ) 「古典B」は、現行の「古典」の内容を改善したものとする。「国語総合」の学習を踏まえ、古典の原文や、古典についての評論文などを教材として取り上げ、話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの言語活動を通して、系統的に古典に接することができるようにし、古典に対する関心と知識を高め、古典を読む能力を育成する。

また、単位数は、次の通りである。

国語総合	4	(必修科目、2単位まで減可)
国語表現	3	
現代文A	2	
現代文B	4	
古典A	2	
古典B	4	

これまでと大きく変わったのは、現代文と古典の内容がAとBとで差異化されたことである。特にA科目は「親し

む態度」の育成を目指しており、B科目において深く広く学ぶことが求められる。

ただ懸念されることは、B科目が、いわゆる受験科目としてのみ受け止められ、特に、古典において文語文法を中心とした訓詁注釈のみの授業が行われることである。

古典Bは、あくまでも「国語総合」の学習を踏まえており、「話すこと・聞くこと、書くこと及び読むことの言語活動を通して、系統的に古典に接することができる」ことを目標としている。

このことは、学校教育法（平成一九年六月改訂）に「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう」（第三〇条2項、高等学校は六二条で準用）とあるように、高等学校での教育内容は、生涯にわたる基盤を培うことであり、高校卒業後にも継続して学ぶ姿勢を育成することに意味がある。

現在、高等学校においては、学力の二極化が問題となっている。特に、学習意欲をどのように育成するかということが授業、わけても古典の授業の課題となっている。

平成一五年度に行われた教育課程実施状況調査においては、高等学校における古典嫌いは約七割にも及ぶということが報告されている。このことを、真摯に受け止め、高等学校教育における国語の授業を改善しなくてはならない。今回の科目の改訂は、授業改善を求めているのである。

**たかぎ のぶお** 横浜国立大学教育人間科学部教授。専攻は教

育方法学、国語教育学。中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会国語専門部会主査代理、独立行政法人国立国語研究所評議員も務める。三省堂「明解国語総合」編集委員。